

## 観察記録 (Observation)

## 獣のフィールドサインから地下生菌を探る — 亜高山帯におけるツチダンゴ属菌の興味深い採集事例 —

### Detecting truffle-like fungi with the clue of field signs by animals — a case of *Elaphomyces* spp. in subalpine coniferous forests

金子 義紀

Yoshinori Kaneko

神奈川県足柄上郡山北町

Yamakita-machi, Ashigarakami-gun, Kanagawa, Japan

E-mail: yoshijinzi@gmail.com

Article Info: Submitted: 9 June 2023

Published: 30 September 2023

筆者はこの一年、富士山や南アルプス、奥秩父等のコメツガ・シラビソ林を主体とした亜高山性針葉樹林を主なフィールドとして、地下生菌を探してきた。

低山や低地の広葉樹林においては、落ち葉下を探すことで比較的容易に何らかの地下生菌が見つかるものであるが、落ち葉の堆積に乏しく、苔むした亜高山帯の針葉樹林ではそうもいかない。手当たり次第に苔を剥がせば、たまには見つかることがあるかもしれないが、自然公園法による規制もあるし、そもそも非常に効率が悪い。また、せつかくの綺麗な森や景観を荒らすことにもなり、何より良心が痛む。そのため、亜高山帯で地下生菌探索を始めてしばらくのうちは、地道に歩き回って、運良く地表に露出した子実体を拾うことしかできず、何か面白い探し方はないものかと常々考えていた。

2022年9月、いつものようにコメツガやシラビソの林で地下生菌を探していると、ツチダンゴ属 *Elaphomyces* spp. が見つかる場所の共通点にふと気づいた。それまでは苔の繁茂が少ない獣道などを注視していたのであるが、むしろツチダンゴ属が見つかるのは、苔むした林内に点在する、苔が不自然に途切れている場所が多かった。そのような場所をよく観察してみたところ、『過去に獣の類が地面を掻き出したような痕跡のある場所』であることが分かった (図1)。

地中に子実体を形成するツチダンゴ属の発生が地表の特徴でわかるのならば、地下生菌屋としてこれほど楽なことはない。偶然かもしれないとは思ったものの、試しにそのような「地上のサイン」を探し回ってみたところ、その日は珍種クロツチ

ダンゴ *Elaphomyces miyabeanus* S. Imai やアミメツチダンゴ *E. muricatus* Fr. (広義)、その他褐色のツチダンゴ属菌など、数種類のツチダンゴ属が短時間のうちに次々と見つかった (図2)。

筆者はその後も同様の探し方を続けており、12～3月の積雪期を除く数か月間で得られたツチダンゴ属は推定10数種、約300標本に及ぶ (2023年6月時点)。ほぼ全ての標本がそれぞれ別の地点で確認されたものであり、好成績と言って差し支えないように思える。獣に苔を掘り返されて何日も経たないような場所からも、非常に高い確率でツチダンゴ属の子実体が見つかることから (図3)、実際に食べているかどうかはともかくとして、何らかの獣の好奇心を煽る匂いがでているのは間違いないさそうである。ただし、筆者はツチダンゴ属から特別な匂いを感じたことがない。

獣のフィールドサイン (筆者はツチダンゴサインと呼んでいる) を活かした採集方法のメリットをまとめると、以下のようになる。

- ・短時間に多数の地点で複数種のツチダンゴ属が見つかる
- ・地表に露出した子実体を拾うだけなので、熊手やガーデンレーキなどの道具を使わず省力的。また、地表面を荒らさないので自然環境にも優しい
- ・ツチダンゴ属の発生状況を容易に把握できるため、一日で広範囲の調査が可能
- ・タンポタケ類やハナヤスリタケ *Tolypocladium ophioglossoides* (J.F. Gmel.) C.A. Quandt, Kepler & Spatafora などの菌生冬虫夏草も、ツチダンゴ属に付随して見つかることが多い (図4)
- ・冷涼な亜高山帯で探すため、夏季でも蚊やダニ、暑さに

悩まされることがない

季節による成果の差異については、雪の残る4月でも多数の地点でツチダンゴ属の新鮮な子実体を確認できたことから(図5)、端境期は特になさそうな印象である。また、このようなフィールドサインのある場所では、他の地下生菌としてクルミタケ属菌 *Hydnotrya* spp. が観察されている。

はたして、ツチダンゴ属をびたりと掘り当てる名ハンターは何者なのか(地面の形跡からは中～大型の哺乳類と推察される)、どのような揮発成分がツチダンゴ属から出ているのか、国内には何種類のツチダンゴ属が分布しているのかなど興味は

尽きないが、とり急ぎ今回は採集方法の紹介に留めておきたい。また、梅雨～盛夏にかけては個人的に未調査の時期であり、今後の成果が楽しみである。引き続き亜高山帯における地下生菌の採集に努めたいと思っている。

### 謝辞

末筆となったが、折原貴道博士には日頃から地下生菌について多々ご教示いただいております。今回の採集方法についても報告を勧めていただいた。記して深謝の意を表したい。



図1. 地面を掻き出したような痕跡(苔が不自然に途切れている場所に注目)。



図 2. クロツチダンゴ *Elaphomyces miyabeanus* (左上) ほか (2022年9月20日 富士山).



図 3. 獣に苔を掻き出されたばかりのような場所。手に取っているのは菌根に包まれた子実体で、ここではアミメツチダンゴ *E. muricatus* (広義) が見つかった。



図 4. ハナヤスリタケ *Tolypocladium ophioglossoides* などの菌生冬虫夏草もよく見つかる。



図 5. 雪が残る早春でもお構いなしに見つかる (2023 年 4 月 19 日 富士山).